

2019年9月3日@電気通信大学

RA協議会第5回年次大会・B2セッション(第7回 JINSHA 情報共有会)

研究の発展につながる評価とは

～「責任ある研究評価・測定 Responsible Metrics」とURAにできること～

コメント

大阪大学経営企画オフィス研究支援部門
チーフ・リサーチ・アドミニストレーター
川人 よし恵

大阪大学の状況

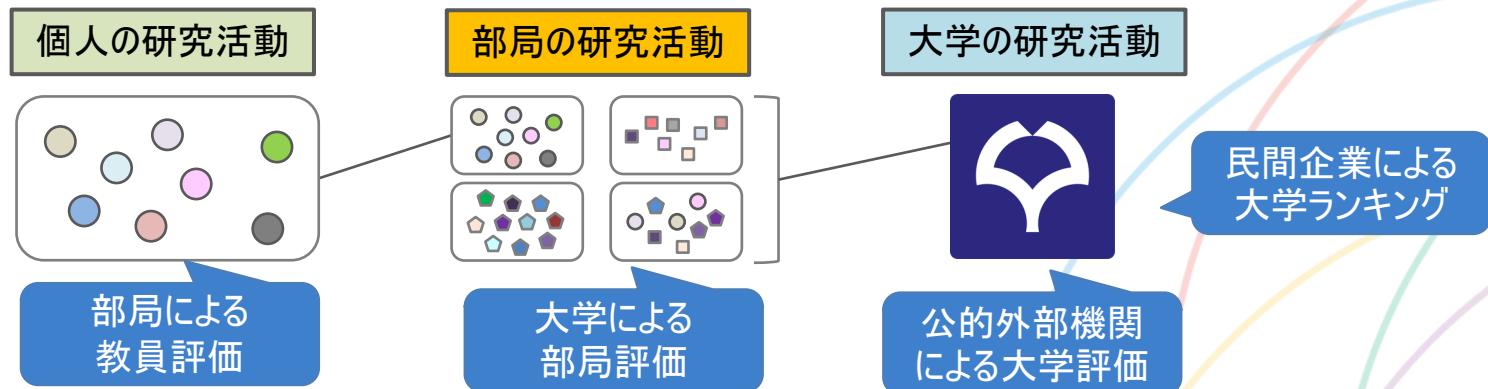


〈基本情報〉 ※人数は令和元年5月1日現在

- ✓ 教員数 3,261人 職員数3,447人 非常勤職員等 3,699人 学生数 学部15,285人＋大学院 8,031人
- ✓ 指定国立大学、重点支援③(卓越した教育研究型)、QS2020で71位、THE2019で251–300位

〈「研究」に関する指標の状況〉

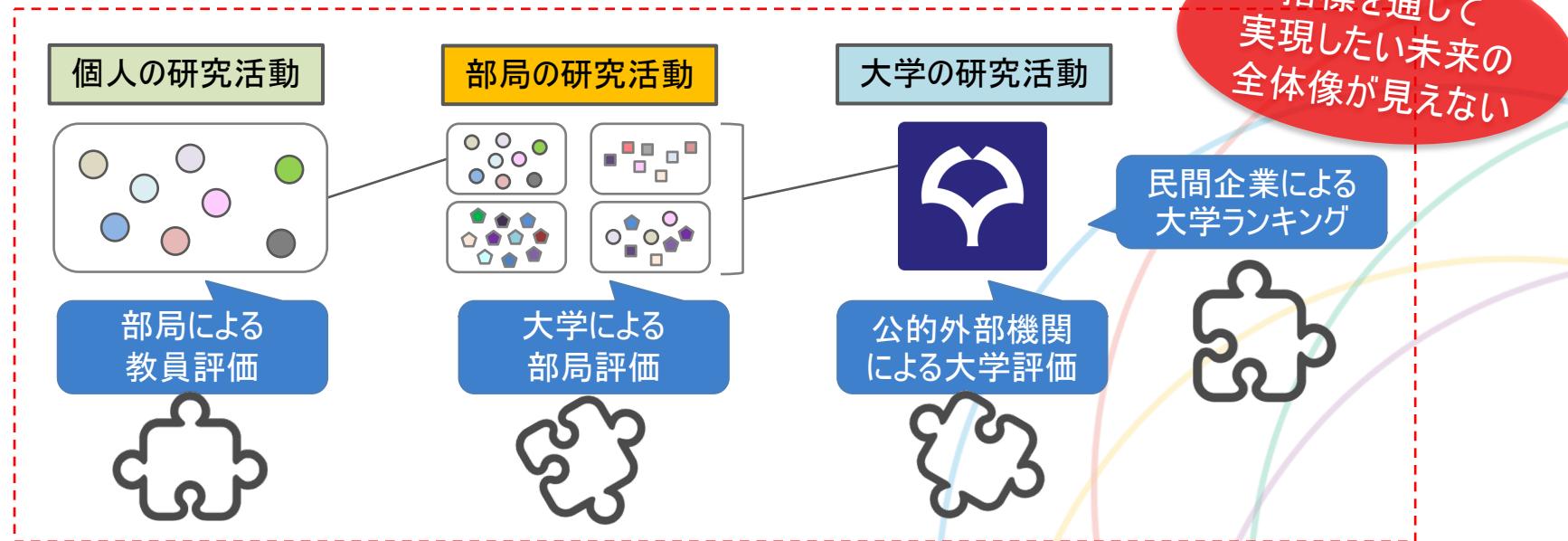
- ✓ 「自ら定める指標」と「外から定められる指標」からなるKPIが多数存在する。
- ✓ 部局による教員評価、大学による部局評価、外部機関による大学の評価の3レベルにおいて、それぞれ指標や評価方法が異なる。
- ✓ 指標運用に膨大なコストがかかる、特定分野の活動実態を反映した指標がそれ以外の分野にも適用される等、様々な課題が出てきている。



組織(全学/部局)の研究活動は個人の研究活動の総体であるが、
組織としての「研究」に関する指標は、教員個人の評価指標と必ずしも一致していない

大阪大学の「研究」に関する指標について感じていること

- ✓ 以下の3レイヤーで、教員、職員、URA、部局執行部、大学執行部、文部科学省、大学改革支援・学位授与機構、民間企業等の各ステークホルダーは、自らが関与する指標の設定・運用に対して責任を果たしていないわけではない（少なくとも、「管理」という側面での限定的な責任は果たしていると考えられる）。
- ✓ しかし、パズルで言うピースとしての責任（限定的な責任）が果たされるだけでは、学術研究の発展やイノベーション促進に向けた指標の設定・運用に関するビッグピクチャ（未来の全体像）を描けないのではないか。



各ステークホルダーは、指標に関してパズルのピースとしての責任を果たすに留まっていないか？

責任ある研究評価・測定のために URAにできることとは？

- ✓ 時間をかけて価値創出を図る大学の現場が、指標に関する外部機関の意志決定や変化のスピードに振り回されている現状も問題。指標に関する各ステークホルダーが歩調を合わせ、新たな価値創出の未来像を共有するには、各責任の基層となる「包括的な責任（仮称）」を検討・形成する必要があるのでは。
- ✓ URAは指標についての意志決定者ではないが、多様なステークホルダーと関わりながら仕事をしているため、指標に関する状況を俯瞰しやすい他、指標に基づくデータ分析や先進事例にも明るい。こうした強みを活かせば、多様なステークホルダーの間をつなぎ、指標に関する「包括的な責任（仮称）」についての議論を興し、ともに目指すべき未来像の共有に貢献できるのではないか。

